

平安時代の女性像の表現

白 畑 よ し

大陸文化から脱皮して、一応和様文化をつくりあげた平安時代について、各分野からの研究が行われているのは知られる通りである。殊に国文学の方では、近頃とみに女性の関心が高まった意味もあってか、その生活や人間性などに、種々の点から光をあてられることが多いようである。当代の物語文学が主に後宮サロンを背景とした、女房たちに創作されたので、殊更に女性の追求が行われるのは当然であろうが、側面的な理由の一つとしては、現代の文明的な生活様式や、意識の表現などとはあまりにかけ離れた時代に対しての一種の好奇心を抱かせるためもある。当代の女流の作である物語、随筆などによまれる人間の心情、例えば喜怒哀楽というようなことは、いまの私たちにも深く共感をよび、隔世の感があるとは思われないし、また四季折々の自然景やその風物に対する観照にしても、今と昔とはそれが変貌している面はあるにしても、それほど大きなちがいはあるとは思われない。ただ物語に登場する女性たちの容貌や、その粧い等については、例えば源氏物語には独特のみやびなことをばをつくして形容しているが、しかし文章からよみとる想像では手のとどかないようなもどかしさを覚える。容姿の美醜がその運命を左右することの最も著しかった当代の貴族や上流の女性たちを、視覚を通じて知り得ることが出来れば、物語の理解に、多大の効果をもたらすわけである。いうまでもなく、当代の絵画、彫像の遺品の表現を知見することが、文章の上の想像のもどかしさを具体的に充たすことになるであろう。

その好例としてあげられるのは、十二世紀前半頃を作期とする源氏物語絵巻である。(五島美術館、徳川黎明会蔵)源氏物語の絵画化は紫式部が物語を創作した十一世紀のはじめ頃に既に行われていた

であろうことは、当時の物語の鑑賞には、つねにその絵を伴っていたことから推測される。そして現存する源氏絵巻は前世紀に描かれていた絵の様相を、かなりよく踏襲しているものと推察される。つまり当時に女性のはなしことばでつづった、浪漫な内容の物語絵は「女絵」と呼ばれていたと考えるが、その表現には女性好みの独自の個性的な定型があり、その定型の大様はあまり変わらずに、平安時代を通じて享けつがれていたといえる。そしてこの物語絵に描かれる女性の姿は、実際に人々の期待を満足させる美女として表現されたものであった。ただ、いま見る源氏絵巻の人物の顔は引目鉤鼻の最も単化された、いわば非写実的な描法なので、或いは実態の風貌は浮んで来ないという向きもあるが、しかし女性たちの顔の円味の豊かな下ぶくれの輪郭とか、また容姿が全体に小柄で均整のとれた趣きには、まず少女めいたという感じが印象される。こうした顔や姿の女性は源氏絵巻より少し作期は降るが、扉面法華経の下絵（四天王寺、その外蔵）にも大体に共通して描かれているので、必ずしも貴族に属する身分の女性に限らず、各層の人たちにわたっているので、当代の好みに通じることがうかがわれる。

一方物語文学の上での、その美女たちの様子には種々の形容があるが、大体に身長の高い人は好まれず、小柄な体つきで、成熟した豊満な趣きよりも、清楚で、しかも愛らしさの具った、長い黒髪の艶かなことなどがあげられている。それは源氏絵巻に見る女性の絵姿とかなりよく重なり合うものであり、したがって当代の美女のあり方が、物語の文章によまれる意味と、現存の絵巻に見る趣きとは不離でないことが知られる。

いうまでもなく美術史の研究は遺品とその関係文献とが相俟って、定義されるのは常道であるが、遺品によっては、殊に上代では必ずしもその考証にあてはまる文献がないことを経験する。それ故当代に源氏物語とその絵画化の絵巻の両方が現存するのは、稀有な幸であると痛感されるわけである。若しどちらかが失われていたとしたら、時代的な雰囲気はもとより人々の容姿などについての想像は、それほど明らかに浮かんで来ないと思われる。さらに史上に最もすぐれた美意識に培われた当代人の生活様式の理解を深めることも、それが引いては一般の美術の遺品考察の上に極めて貴重な存在である。いまその一々について記すことはむずかしいが、例えば源氏絵巻の濃厚によどむ夢幻的な色調に伴って、人物の表情や姿態に動きのない、静止的な画境は、引目鉤鼻の描法とも併せて、現

実とはかけ離れたという印象もあり得るが、これもまた物語の文章を通じて、その貴族ははげしい感情をあらわにせず、内潜させて平静を保つことがその分限であったと推察される。女性にはいっそうつつましい行動が求められ、その振舞は際立たずに、こまやかな情感で包むように教育された。なおこのような女性の生活にそくして女性たちの身辺に使われる器や、調度品などには、形体のささやかな、繊細な美しさを具えたものが作られたことも知られる。それも当代の工芸の遺品や、その装飾文様の趣致に思いあたるふしが少なくないと思われる。

総じて平安時代の造型について、いわゆる優美とされている表現には、多分にこの少女めいたともいうような美しさをふくむ趣きが好まれたことに、素因があるのではないかと私には感じられる。

以上のように源氏絵巻や、扇面法華経に見る女性像に関連して、なお同時代の主な仏画の遺品にわたっても、例えば大治二年（一一二七）制作の十二天像中の水天像（京都国立博物館蔵・旧蔵教王護国寺）には両脇侍も共に潑刺としてふくよかな少女の面影がしのばれる。また普賢菩薩像や、虚空蔵菩薩像（共に東京国立博物館蔵）の貴族的な優雅な美しさの裡に、ほのかに少女の清らかさがただよう趣きが注目され、そして普賢延命像（松尾寺蔵）には一種の鄙びた素朴味と、生来の豊かな明るさのある少女を思わせる。

仏画にくらべて遺品の多い十一・二世紀の彫像の中には、さらに少女らしい表現の遺品があげられるが、立体的な造型の彫像は平面的な絵像にくらべて、身近な切実さがより印象される例が多いと思われる。著名なものとしては天喜元年（一〇五三）落慶供養の行われたという平等院鳳凰堂内の長押にかけてある雲中供養仏群の多くに、しなやかな姿態と共に、童顔の愛しさを具える例があげられるであろう。そして十二世紀には、「人肌の大日」の俗称のある中尊寺の一字金輪像に、少女の若々しい生命力が宿っているように感じられる。さらに美麗な小像として知られる久寿元年（一一五四）造立とされる峯定寺の千手観音像には、殊にその少女らしさの極致が示されている。この像には多種の極めて繊細な截金文様の装飾が施されている点でも最高にすぐれた例であるが、いかにも「子めかしさ」という当代のことばにふさわしい姿に通うものであって、少女の本能的というような妖しい神秘性を昇華させた表現に驚嘆される。

このように当代の絵画や彫像に少女めいた様相を表現したことについては、いくつかの意味があっ

たと推察されるが、やはり多幸な可能性を未来に含む若い生命に対する憧憬と共に、その清純なだけ
れのない身心に、無限の美を覚え、愛著した故であろうと思われる。特に当代の感傷的な女性たち
は、盛りの年齢をすぎると「さだすぎた」としての諦念が強かったので、若さをいとおしむ心が強か
ったのではないかと考えられる。

なお仏像でこうした姿をとどめる例は、比較的天台系の遺品に気付かれることが多い。なお飛鳥・
白鳳時代の金銅仏にも童顔に通う例があるのは知られる通りであるが、そのいわば生のままの古拙さ
のもつ一種の神秘感と、異なることは殊更いうまでもないであろう。平安時代の絵画や彫像の少女ら
しさの表現には、史的な年輪を積み重ねたというような美意識にこなされた多元的な密度のある麗し
さがうかがわれる。

以上のことから平安時代の物語文学の記述の一端に相乗しての、蕪雑な考察であるが、国文学に
ついてはもとより門外な立場としての、皮相な見解にとどまることを痛感する。このような考証をも
っとより広く深くするためには、特に文学、有織故実、芸能をふくめての歴史、また仏教等の分野と
の学際的な交流による研究ができればと希われるのである。

省みれば吾国の美術史の研究が緒についたのは今世紀に入ってからのことである。西欧にくらべて
かなり遅れているわけで、また基礎的な研究資料の集成の時期ではあるが、遺品の解明を深めるため
には、人文的な種々の角度から光を照し合わせることによって、潤おいのある洞察力がより加えられ
ると思うのである。